

各部管理職を経て通算三十八年余の公務員生活を第一管区海上保安本部を最後に停年退職させていただきました。

## 私の引揚日記

兵庫縣 塩谷 隆徳

終戦後既に四十五年を迎えんとする今日、あの悲惨極まりない過去を回顧したくはないが、後世の記録として残し、戦争がいかに悲惨であり、人類の不幸であったことを記し、後世への戒めともなれば幸甚と考える。この手記は、私個人の極めて端的のものであるために、当時の引揚者何十万人の苦勞の真実の一方の一も表現できないが、国土に最も近い植民地であった南朝鮮でさえ、以下のような実情であったので、遠き外地におられた方々の引揚の苦難は、今日では想像も及ばないものがあつたことは事実であるが、今日の繁栄を見ずして、外地で他界した大勢の方々もあつたことだ。

私は朝鮮警察官として、約二十年間、全羅北道内に勤務したもので、終戦後の治安状況を前編に、また南朝鮮の引揚状況を後編として、拙文を省みず綴ってみよう。

### 終戦から引揚までの管内の状況

終戦の詔勅に号泣す

昭和二十年八月十五日早朝、総督府より長文の極秘暗号電信が入った。解読したその内容は、私どもには晴天霹靂の悲報であった。(当時同地警察本部幹部)「正午を期し日本軍は米軍に無条件降伏することを、天皇陛下がラジオ放送される」と。

直ちに本部幹部級を総召集し、これに対する処置について鳩首会議を開いたが、未だかつて我々の体験したことのない敗戦、しかも植民地でのこと、適切な方針も樹たぬまま、不安と焦慮のみ。その間に管内各署に極秘通達したことはもちろん。いよいよ正午、ラジオのスイッチを入れ、一同緊張の面持で、流れ出る陛下の下音も悲壮に聞こえる。「日本軍は米軍に無条件降伏する。この責任は朕が責任である」とのお言葉に一同は崩れるように号泣した。今まで勝つために、勝つためにと張り切つて

いた心の琴線が切れたように、落胆消心の思いは、今なお忘れぬ悲報であったことを。

朝鮮民衆の豹変に驚く

戦時中日本国民として、一億一心、国のために、勝つためにと指導してきた。朝鮮民衆もその方針に協力してくれていたように我々は考えておったところ、事實はそうでなかった。彼らは詔勅の降るや一変して、敗戦と日本人を罵り、彼らの勝利と、既に準備していた、朝鮮国旗の手旗を打ち振って、朝鮮独立万歳と歓喜熱狂し、日本人を蔑視し、罵倒を浴びせるようになった。今まで指導者として、平和に暮らしておった日本人には、全く意外千万のことであった。在留日本人の恐怖と苦難は、この時から始まった。

米軍駐留と治安状況

緊張と平穩であった街も、一瞬騒然たる巷と化し、ただなすことを知らぬ悲惨なる状態で時間は過ぎた。

八月十六日、我々は米軍が進駐して来るまでに、秘密書類の焼却を、炎天下で夢中での作業であった。翌十七日、米軍が進駐して来た。事務その他の引き継ぎが始まった。

我々警察官は当分の間「米国軍政補助官、左官相当官」として勤務することを命ぜられ、以来その腕章をつけて、二か月間治安維持の任に当たった。

各地で暴動反乱騒擾事件続発

日を追うに従って、山間部地方において、朝鮮民衆の不逞の徒のために、警察署や駐在所が襲撃され、占拠された上、職員は拘禁され、銃器は奪略され、あるいは民間の富豪の家財を掠奪し、主人を監禁の上、金銭を強要された等々の情報が、ひんぴんと入って来る。そのつど、武装して鎮圧のため、数十人の署員を派遣する。何れも命がけの思いで、出動鎮圧すること幾度であったか。終戦後は平和になるべきはずなのに、ここでは逆に地方的戦時状態が始まった。

神社々殿焼き払わる

神国日本を象徴し、戦勝を祈念し、崇拝して来た立派な神社殿も、彼らの手により放火されて、みるみる中に灰燼に帰してしまったので日本人は一層傷心した。

刑務所囚人破獄す

市郊外に刑務所があり、囚人百数十人を収容していた。

殺人、強盗、暴行強迫等々の凶悪犯を始め、思想犯もおつた。八月二十日頃早朝、破獄の急報により、部下五十人を召集、武装して急拠出動した。囚人達は監房を全部解放し外に出て、武装の監視職員と対峙するいは脱走の気配もあり、騒然たるところであった。この事件は思想犯の釈放要求に端を發してのことであったので、協議の結果、事態に応じてこれらの者を釈放し、他の囚人は説得鎮撫し、騒ぎは鎮圧された。

#### 建国委員会組織さる

彼らは独立し、行政権を彼らの手によって運営すべく、かつての思想犯の前歴者、リーダー格により、建国委員会を組織し、すべての行政を握ろうと計画された。地方の警察官や郡庁などは、もうこれらの者の牛耳るところとなり、占拠され、従来と本末顛倒の実情であった。かくして彼らは次第に組織を固め、諸種の行政を素人なりに握るようになった。ただし郡市の警察権は、米軍指揮下であったので、我々はこれらと対抗的に勤務を続けた。

#### ガソリン倉庫及び米倉庫奪取さる

石油倉庫は警察の管理下で、民間人に委託経営させて

いた。米倉庫は郡庁の方で同様であった。ところが双方とも、建国委員会の手に奪取されてしまった。かくては暴徒鎮圧のために出動することもできなくなり、一方は留日本人への米の配給もとまる重大な事態となったので、これが返還交渉をしなければならぬこととなった。石油倉庫の返還交渉の大役を私に命ぜられたので、部下三人を連れ、郡山府庁を占拠している建国委員会本部に行った。当時の事情から推して、相当困難な問題であるので、決死の覚悟で臨んだ。部下三人を室外に待機させ、万一の場合は、本部に急報せよと命じて、単身拳銃を肩に日本刀帯刀のまま交渉に臨んだ。交渉委員長を見ると、かつて私が同署の特高主任をしていた時代の、思想的要人のリーダー格の男であって、顔見知りであり、對話も何回もしたことがあるので、案外気易く挨拶をしたが、権限は前と転倒した実情にあるので、昔日とは違う。約一時間余の押問答の末、私の理論的説明をやっと理解してくれて、数名の幹部級としばらく協議した結果、在庫品を折半することに決定したので、取決書を取りつけ、直ちに現物を警察本部の仮倉庫に移送した。決死の覚悟で

の交渉であったが、案外容易に目的を達することができた。この時ほどうれしいことはなかった。なぜならば、引揚の輸送にも、暴徒鎮圧の出勤にも、これが何よりも重要な資源であったからだ。上司一同も、私の功績を讃えてくれた。米倉庫も難航したが、数日後に解決した。そのほか庄迫、妨害、占拠、暴行等々、あげれば暇がないが、筆舌では尽くせない悲惨極まりない実情だ。

#### 南北に二分された北鮮の情報

交通通信のほとんど途絶えた当時ではあるが、ソ連軍の進駐した北朝鮮の治安状況を、南鮮に命からがら逃れて来た人々の話によると、ソ連軍や暴動のためにすべて略奪、監禁、暴行、拉置等々、あらゆる迫害を受け、在留日本人は住むに家なく、食うに糧なく、その惨状は極に達し、南鮮へ逃れることに懸命で、一家は離散し、女は男に、あるいは鮮人に扮して、南下しつつあるが、途中で大半消息不明になっていると。それに比べると、南鮮はまだ恵まれていた。

#### 引揚状況

終戦後の邦人引揚準備、世話人会組織す

前編で述べたように、騒然たる日々が続き、在留邦人の不安はつのるばかり。一日も早く故国に引揚げなければならぬ実情となったので、民間有力者と図り、引揚世話人会を組織して、その計画準備に取りかかったが、輸送機関のほとんどが彼らの手に奪われた当時のこととて、極めて困難な実情下にあった。八方手を尽くして、無駄な日時と、法外な代償を要求されながらも、わずかの輸送機関を確保したものの、官内約二万人の日本人であるので、容易なことではない。終戦処理中最も重大かつ困難なる仕事であったことは言うまでもない。

#### 地方在住邦人を集結す

地方在住邦人は、毎日不安と恐怖の中に、いつ暴徒の迫害を受けるやも知れぬ実情にあったので、本部在りに集結し、知人宅や、講堂、倉庫等に雑居せしめ、引揚の日を待たせた。その間にも、病死する者や、病人あるいは分婉等、苦勞の重積であった。

#### 持ち帰り品制限デマに惑わされる

引揚者の持帰り品は、身の廻り品と金一千円也に制限された。刀剣類はもちろん、貴金屬類、毛、絹織物等の

高級品一切持ち帰っては、途中検査の場合、一人でも違反者が発見されると、その団体全員が足止めされると、彼らの言いふらしである。どこから出たのかわからぬままに、引揚者はそれを信じて、荷造りには一苦勞した。この件は、検査を受けた際に、かかる嚴重なものでなかったことから考え、全く彼らの巧妙なデマに惑わされ、重要なものを彼らの手に詐取された計画的言動であったことが判明したが、後のまつりだった。弱きものは風音にもおびえるのである。

家族を先発帰郷させる

私は職責上終戦処理や、引揚者の世話等々、毎日多忙の日を送り、家族を省みる暇もなかった。家族に気を使っているのは、人様の世話も十分できないので、十月八日の引揚者三百人の中に加えてもらい、五人の家族（妻と子女四人）を先に引揚させることにした。身の廻り品の外、若干の現金を隠し持たすに苦心し、また貯金通帳や国債、保険証書等、永年の苦心の貯えを持たせ、先発させた。

輸送汽車途中何回も停まる

引揚用汽車と言っても貨車で、薬や蕈を敷いた有蓋無

蓋の貨車で、それにすし詰めで、足を延ばすこともできないありさまだ。私も輸送責任者として港まで同乗したが、数時間後に汽車は動かなくなった。尋ねて行くと、機関士等は、石炭が切れたから動けない、石炭を買う金を出せとの要求だ。（その実、石炭は積んであるが、シートを覆い隠している）やむなく、各車両の一同に事情を告げ、金を集めて渡したが、これ位では少ない、石炭不足で高いから、もっと出せと言うので、再び集金し渡したところ、しぶしぶ動き出した。しばらく走って、また停まる。再び同様の要求。馬鹿馬鹿しいとは思うが、どうにもならず、再び集金して渡すと動き出す。途中三回にわたり石炭代を強要されながら、やっと目的地麗水港に到着する。かねて予約手配の汽帆漁船二艘に全員を分乗せしめ、一同の無事帰郷を祈って、夕もやに消え行く船を見送り、私は再び勤務地に引返した。明日は日本の土を踏んで、我が家に無事帰るだろうと、むしろ安堵したのだ。この見送りが家族との永遠の別れになるとは、夢にも思わなかった。

管内最後の引揚に加わる

終戦後百余日は、波乱と多忙の中に過ぎ十一月三十日最後の引揚となった。終戦処理や引揚の世話をした人々が多い。リュックサックに身廻り品を詰め、その上に鍋釜、食糧と、まるで乞食の行列のような一行、いささか心ざびしい情ない感じである。予定した貨車に乗り込んで、釜山埠頭駅に向かった。今度は予定通り、途中の強要もなく釜山に着いた。それは米軍が指揮者として、つき添ってくれたからである。

#### 釜山埠頭の貨物倉庫で三泊の苦難

釜山港には各地よりの引揚者が集結し、ゴッタ返していた。収容倉庫も満員で入る余地もない。不安の中に夕刻まで貨車の中で待ったところ、倉庫が空いたので、一同ホッとて倉庫に入る。見れば延敷の貨物倉庫だ。荷物にもたれて座る程度で、足も伸ばされない。先発の人々の話では、三日間ここに泊まったとか聞き、ウンザリする。なぜなら、食糧をそんなに持っていない。わずか二日余りのつもりで弁当程度に缶詰ぐらいだ。三日間の食料延ばしは心細い限りだ。病人が出る。乳幼児は泣く。全く地獄の様相である。夜は荷物にもたれての仮眠で疲

れも甚だしい。

かくして不安と苦しみの中に三日目の朝を迎え、今日は乗船できるぞと、一同望みをかけてか、疲れながらも活気がある。ところが、折悪くして強風だ。船は出航できないとのこと、一同はまたガックリ。

夕刻に風も凪いだので、いよいよ乗船と埠頭に急ぎ病人等をかばい合いながら、荷物の検査である。誰しも自分のものを隠し持っているので、内心こわごわのひと時だ。案外簡単に検査も終わり乗船する。荷物の制限品なんか、何ら関係はなかったもので、ほっとした反面、彼らの制限流布にだまされて、目ぼしいものを持ち帰ることができなかつたと思うと、悔しい限りであった。

#### 人生最大の悲劇に茫然

ヤツとの思いで家に着いた。先に引揚げさせた家族五人は、いかほど喜ぶだろうと家に着いたところ、舎弟の家族が出て来て、私の家族は一人も見えない。子供等と尋ねると「誰も帰っておらぬ」との一言は、私の脳天を強打されたよう。眼はクラクラと、あたりが暗くなった。喜んで迎えてくれるのだろうかとの楽しい思いも、一

瞬にして消え去った。五十日前に帰らせたのに、まだ帰っていない。妻の里家に尋ねても帰っていない。他に帰るところはないはずだ。いよいよ不安はつのるばかり。日本の土を踏んでいけば、何か便りはあるはずだ。それがないことは、日本の土を踏まぬ先の事故だろう。不安と焦慮と悲歎の極。もしそうであれば、私の家族だけではない、他にも多くの同船者がいる。百五十人、あるいは三百人の多数だ。さっそく先に帰った同僚の家族を調べ、その安否の調査を照合する便りを数名に出した。

不吉な回答来たる

当時一緒に引揚げた家族の通信では、麗水を共に二艘船出したが、途中荒天で波高く、途中対馬に一時避難して、翌日唐津に無事到着したが、一艘の方は、対馬に至る間で灯火を見失ない、対馬にも寄港せず、先に唐津に着いたのではないかと思つて、上陸後待ったが、一艘はとうとう到着しなかった、という返事だった。また一方私と同船した者の家族二、三人からは、家族が帰っていないが、貴宅家はどうかとの便りに、いよいよ絶望の色は濃くなった。さっそくこれらの方々に（山梨県人家族

七人、高知県人家族三人、宮崎県人家族六人）連絡し、捜査の日取りを定め、博多に集合するよう通知し、当日それぞれ博多に集合した。

私は舍弟を伴つて、都合五人が福岡引揚援護局に出向き、調査を依頼したが、上陸の形跡もなく、確かな情報も得られなかったが、係員いわくに、十月十日前後に、荒天のため難船したのか、帰らぬ船が何隻かあったようだとのこと、いよいよ不安はつのるばかり。

更に上陸目的港たる唐津港に行き、関係機関に尋ねたところ、今までに何隻もの船が帰つて来ないようです。たびたび家族の方々が探しに来られますが、当方では確実なことは判明していない。相当多数の船が帰つて来ない様子ですとのことに、いよいよ断念する他ないと、同僚とともに淋しい思いで、重い足どりで帰宅した。互いにその後の情勢を連絡するよう約束して別れた。その後、次第に判明したことは、二艘の中一艘の同船者のほとんどの者が、帰っていないとことが明らかになった。途中遭難は確実だととの、最悪の結論しか出なかった。

裸一貫の引揚者が男一匹となる

やっと引揚げて来た喜びを味わう間もなく、人生最大の悲劇に見舞われた私は、男一匹となってしまった。それから一か月、半年、一年と、もしや帰って来るのではないかと、淡い望みの中に経ってしまった。二年も過ぎたが、音沙汰はない。ほかの同僚の通信も同様の悲報である。不本意ながら、二か年目の旅立の十月八日を忌日と仮定し、5人の仮葬儀を、悲しみも新たに執り行った。ただ宿命とあきらめる他はなかった。

#### 第二の人生戦後三十年の私の理想

亡くなった家族五人とともに引揚げておれば死んでいいのだ。生き残った命は儲けものだから、余生を社会のために働こうと決心し、再婚して以来武士の商法ながら職を通じて、奉仕奉仕の三十年、事業も意外に伸び、入手した土地が時代のお陰で高騰したので、約四億円以上の土地を赤穂市へ社会福祉のために寄附した。市はこれを塩谷隆徳基金として、私亡き後まで利用することに決定した。これが私の理想であり、亡き家族への供養かと自慰している。

#### 終戦後四か月間の京城の思い出

岐阜県 石神 正雄

私は二百三十部隊に召集兵として入隊しておりましたが、終戦と同時に部隊本隊は帰国することになり、毎日釜山に向かい南下しました。私たち現地入隊者は林大佐以下二十六人残留し、兵器の菊の紋章を削りその処分に追われる日が続きました。食糧品の買い求めに京城の街に出る時は小隊編成を組んで外出せねば危険でありました。市電には、日の丸の旗を二つ巴の朝鮮の旗に塗り替え手に手に持ち、無数に乗り込み無警備状態。警察署の日本人はほとんど逃げ帰り、除隊した朝鮮兵が直ちに警察官となり治安維持に就いておりましたが、不安な街に化しておりました。

数か月前までは何の差別もなく親子兄弟のように付き合い合ってきたのに、敗戦の無惨さに腹立ちを感じるようになった。十月末ごろまでに日本人家族の大半は本国に引き揚げ、残留家族は一日として不安を感じずにおられず、一